

初期のイエズス会と「イエズス会女」

～なぜロヨラは女性会員を禁止するに至ったか～

櫻井美幸

はじめに

第1章 イグナチウス・デ・ロヨラとイザベル・ロゼル

第1節 バルセロナ時代

第2節 ロゼル、ローマへ

第3節 修道誓願の解除へ

第4節 会憲での禁止

第2章 初期のイエズス会と修道女の関係

第1節 修道女テレサ・レジャデル

第2節 禁止令の影響

おわりに

はじめに

女性の活動の幅が広がった中世後期と比較して、近世では家父長制の伸張や、都市経済の衰退の下で女性の活動領域は縮小しておもに家庭に集約されていった、とされている。社会経済的領域についてはこの指摘は妥当といえるが、それでは宗教的領域ではどうだろうか。カトリックにおいては、この指摘は必ずしも当てはまらない。かなりの広範囲に渡って、教育・伝道などの司牧活動に積極的に関与しようとした修道女・半修道女たち、いわゆる「イエズス会女」たちの活動が見られたからである¹。彼女たちが目指したのは司牧活動における男女の完全な役割平等であるが、この点では、元来保守的なカトリック教会において、彼女たちが大きな困難に遭遇したのは当然であった。そもそも「イエズス会女」という存在自体が大きな矛盾を孕んでいる。当の指導する立場であるイエズス会が、会憲において女性分派を禁止していたため、本来なら「イエズス会女」という修道女は存在しない筈である。教会法上は確かに「イエズス会女」は存在しない。「イエズス会女」(Jesuitinnen, jesuitissen)とは、イエズス会を攻撃対象とした敵対勢力が、イエズス会の活動を模倣して同会士から宗教的指導を受けている女性たちを揶揄して呼んだ名称なのである²。

¹ イエズス会女については、櫻井美幸「「イエズス会女」と呼ばれた女たち—対抗宗教改革期における女性の宗教運動—」『女性史学』23号、2013年、1～12頁参照。

² Grisar, J., Jesuitinnen. Ein Beitrag zur Geschichte des weiblichen Ordenwesens von 1550–1560 (以下 Jesuitinnen

教育、伝道などの活動に従事したこのようなイエズス会女の団体は、最盛期の17世紀後半においてヨーロッパ北西部を中心に30以上にのぼった。女性が主体的に司牧活動に関与したことに対し、J. Grisar や A. Arens といったイエズス会の歴史研究者たちは、近代以降の女性解放運動の先駆けとして好意的に捉えている³。A. Conrad は、イエズス会がカトリックの伝統から離れて世俗において司牧活動をすることで自らの魂の救済を目指し、個人の意思決定に重点を置いたことに注目し、イエズス会女の活動は、イエズス会の活動に参加することで、女性の意思決定の自由が教会内のみならず世俗の場でも拡大する可能性を秘めたものであったことを述べている⁴。ただし、当のイエズス会女の代表格で英国女子修道会の始祖であるメアリー・ウォードが「世俗では女性は男性に従うべき」と述べていることから⁵、こうした女性解放論との繋がりを過大評価するのは危険であろう。

会憲で禁止されながらも、なぜ多くの女性たちはイエズス会に魅了されたのであろうか。イエズス会は隣人救済のための布教を目的として設立されたのであり、そのためには既存の修道会と異なり、世俗で自由に活動することが必要であった。したがって、禁域制や共同祈祷を否定し、統一した修道服もなく、活動を制限されることがないよう教皇直属とし、在地の司教権力に服従することを拒否した。つまり、従来の修道会のように修道院に籠もるのではなく、世俗で精力的に活動する訳であるが、中世後期以降では女性たちは貴族や名望家以外では修道院に入ることが難しくなったことから、第三会やベギン会などの半修道団体⁶に参加することが多かった。このような伝統が強かった地域（おもに北西ヨーロッパ）において、イエズス会女団体が集中しているのは偶然ではないであろう。既存の修道生活に飽き足らない宗教的情熱を持つ多くの女性たちの心をイエズス会は引きつけたのである。

実際、イエズス会創設者であるロヨラ (Ignatius de Loyola) の存命中から彼を支援し、彼から指導を受けようとする女性たちは後を絶たなかった。ロヨラがバルセロナにいる時から、地元の富裕な女性たちがグループを結成して彼を支援し、パリに留学中の折は金銭的に彼を支えた。また、ロヨラは当時の女子修道院の改革に関わっていた。ローマへ行ってからもその熱意は続くのだが、バルセロナ時代も、地元の女子修道院改革（風紀が乱れ、悪弊が蔓延していた）に積極的に関与し、彼に指導を求める改革派の修道女たちと文通を続けていた⁷。詳しくは本文で述べるが、少なくとも

と略記), in; Iserloh, E./Reppen, K., (Hrsg.), *Reformata Reformanda. Festgabe für Hubert Jedin zum 17. Juni 1965*, Bd.2, Münster, 1965, S. 71.

³ Grisar, Jesuitinnen., S. 70-113. Arens, A., Jesuiten und Jesuitinnen. Das Verhältnis der Gesellschaft Jesu zu religiösen Frauengemeinschaften (以下 Jesuiten と略記), in; *Für Gott und die Menschen. Die Gesellschaft Jesu und ihr Wirken im Erzbistum Trier*, Mainz, 1991, S. 81-99.

⁴ Conrad, A., *Zwischen Kloster und Welt. Ursulinen und Jesuitinnen in der katholischen Reformbewegung des 16./17. Jahrhunderts*, Mainz, 1991, S. 65.

⁵ 仲間の女性たちに語った演説の一部。「教会内では男女のできることに境界はない」ということが強調されている。U. Dirmeier, CJ (Hrsg.), *Mary Ward und Gründung* (以下 Mary Ward と略記). Die Quellentexte bis 1645, Bd.1, Münster, 2007, S. 357 ff.

⁶ 修道誓約をせず、世俗内で祈祷をし、慈善活動を行った。ベギンは一度異端との嫌疑をかけられ禁止されたこともあった。

⁷ これら修道女たち（正式に修道誓約をしていない女性も含まれる）とロヨラの手紙については、Rahner, H.,

も、初期の段階ではイエズス会は女性への霊的指導を禁止したり、女性会員を拒絶する姿勢は取っていないかった。

しかし、1550年に公布されたイエズス会憲は、第6部第3章588項において次のように規定する⁸。「…さらに、イエズス会士は教皇あるいは長上たちによって派遣されるであろう世界のいかなる所へも行く準備をしていないといけないので、修道女や他の女性を含むあらゆる女性たちの通常の聴罪司祭、霊的指導者として司牧の責任を引き受けてはいけない、しかし例外的な理由で修道院の中で告解を聴くことは許される」とある。なぜロヨラは、というよりもイエズス会は女性への霊的指導の拒絶を会憲で規定するに至ったのであろうか。この件について言及している H. Rahner⁹ や A. Arens¹⁰ も、理由として挙げているのはバルセロナ出身の貴族女性イザベル・ロゼル (Isabel Roser¹¹) とロヨラとの関わりの顛末と、それによって変化したロヨラの女性への霊的指導に関する考え方の変化である。この女性は、ロヨラとどのようにに関わり、イエズス会の女性分派禁止に至る経過にどのようにに関与したのであろうか。そして、会憲で禁止されて以降、イエズス会と修道女たちの関係はどう変化したのであろうか。

本稿は、H. Rahner が編纂したロヨラと女性たちとの書簡集をおもな手がかりとして、ロヨラとロゼルの関係性を軸に、イエズス会憲で女性への霊的指導を禁止するに至った過程を解明し、その後禁止令にも関わらず、「イエズス会女」団体が次々と結成されていくのは何故なのかについての理由の考察を目的とする。具体的には、第1章では、ロヨラとロゼルのバルセロナからローマまでの交遊の変化を追う。第2章では、会憲に女性分派禁止事項が盛り込まれて以降のロゼル以外の修道女たちとイエズス会の関係を追うことで、本来存在しない筈の「イエズス会女」が誕生する過程を明らかにしたい。

第1章 イグナチウス・デ・ロヨラとイザベル・ロゼル

第1節 バルセロナ時代

ロヨラとロゼルとの出会いは1520年代前半に遡る。イザベル・ロゼルはバルセロナで多くの土地を所有する富裕な貴族女性であった。バルセロナの教会で目の不自由な夫とともにロヨラの説教を聴いたことがきっかけで、自宅に頻繁に招くようになった。この出会いのことを、ロゼルは後に

Ignatius von Loyola, Briefwechsel mit Frauen (以下 Briefwechsel と略記), Freiburg, 1956, S.289-478. 所収。書簡の訳出は、本書から行った。なお、これらの書簡の内、一部については日本語に訳されている。イエズス会編『聖イグナチオ・デ・ロヨラ書簡集』平凡社、1992年。須沢かおり訳「イグナチオ・デ・ロヨラの女性への書簡」『キリスト教文化研究所年報』ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所、1991年、127～156頁。

⁸ *Monumenta Ignatiana III, Sancti Ignatii de Loyola Constitutiones Societatis Jesu*, Bd. 3, Roma, 1938, p.190. 邦訳にあたり、イエズス会日本管区編訳『イエズス会会憲：付会憲補足規定』南窓社、2011年を参考にした。

⁹ Rahner, Briefwechsel, S. 292 ff.

¹⁰ Arens, Jesuiten, S. 83 f.

¹¹ 本文では、バルセロナ出身と確認できる女性たちの名前をカタロニア語の発音にしたがって日本語表記した。イザベル・ロゼルは、スペイン語ではイサベル・ロセール。

トレド生まれのイエズス会士、ペドロ・リバゼネイラに話している。「私が聖なる父をみた時、彼は祭壇の階の近くで子供たちの間に座っていました。私は彼を何度も見つめました。彼の顔の周囲に光りが射しているように見えたのです。私は心の中である声が私に言うのが聞こえました。彼を呼びなさい！彼を呼びなさい！と。」¹²

その後ロヨラはバルセロナを離れてパリで学ぶが、彼の学究生活を金銭面で援助するために、バルセロナの富裕な女性仲間と Ignas というグループを結成し、皆で協力してロヨラに金銭を送り続けた。ロヨラはパリ、ローマと移動しながらロゼルと文通を続け、全てではないが多くの手紙が残存している。最初の内、ロヨラは夫の健康問題などの彼女の悩みについて真剣に耳を傾け助言を行っており、彼女に対して大きな恩義を感じていることが見て取れる。

1532年10月10日のロゼル宛てのロヨラの手紙の中で、ロゼルに限られた資産の中でこれ以上金銭を送れないことを許して欲しいと申し出たのに対し、ロヨラは許す理由など何もない、として次のように続けている。「…でも第一に私は自分が知っている他のどんな人たちよりも、あなたに感謝しているのです。考えてみて下さい、これからもあなたが私に対して示してくれた自発的かつ誠実で善良な意志は、あなたが私に送ってくれた金銭と同じくらい大きな喜びと霊的な満足をもって私に受け取られるだろうことを。…」¹³と。ロヨラも身体の不調のことなどの悩みを打ち明けており、宗教上の師弟関係というより、母親と息子のような関係であったことが分かる。しかしバルセロナからパリまで金銭的な援助をし続けることはまだ夫が存命中の彼女にとって大きな負担であったようで、実際こうした援助が後に二人の間で争いの種となるのである。この手紙から4年後、ロヨラは2度目のエルサレム行きを断念した後ローマへ行き、パリで知り合った同志たちと新しい修道会の教皇認証を得るため、奔走の日々を送ることになる。

ロゼルは故郷に留まりつつロヨラに支援を続けていたが、まだこの時点では自身が修道女になる意思は持っていなかった。それを変化させたのが、イエズス会の認証と、ロゼルの夫の死であった。教皇パウルス3世は、1539年9月に口頭でロヨラに新しい修道会を認可する旨を伝えた。そして10月にロヨラの親戚で同志の1人であるアントニオ・アラオス (Antonio Araoz) が、バルセロナでロゼルに修道会認証のことを伝えたであろう、と Rahner は推測している¹⁴。1541年11月8日、かねてから病に伏していた夫のファンを亡くしたロゼルは、寡婦として自由に行動し、資産も使えるようになった。彼女は地元バルセロナで修道女になる道を考え、友でもあるテレサ・レジャデル (Teresa Rejadell) のいる聖クララ修道院 (第2章第1節参照) に入ろうとしたが、様々な障害のため断念した。この女子修道院の改革にはロヨラも以前に尽力していたことがあったので、彼はロゼルにバルセロナでこの修道院を支援してくれることを願っていた。ロヨラは、まさかロゼルがローマまで来ることになるとは予想していなかった。しかし、地元の修道院に入ることが果たせなかったロゼルは、ローマへ行きロヨラに従って修道生活に入るという望みを心の中に温めていくことになる。

¹² Rahner, Briefwechsel, S. 302.

¹³ Ebd., S. 305.

¹⁴ Ebd., S. 316.

第2節 ロゼル、ローマへ

ロゼルは1542年頃から、ローマへ行って師イグナチウスに従いたいと願うようになったらしい。Rahnerは、これがイザベル・ロゼルとイグナチウス・デ・ロヨラの「悲劇の始まり」であった、と述べている¹⁵。同年3月、ピエール・ファーヴル（Pierre Favre）がバルセロナに立ち寄った際、そこでロゼルと会話したことを手紙でロヨラに報告している。「…彼女はすでにローマへ行く準備をしている、もし兄弟 Inigo が許可を与えれば、我らの主である神に、今より何ら妨げられることなく仕えることができるように。…」¹⁶と。ファーヴルはロゼルのローマ行きには懐疑的な立場であったが、イエズス会士の中でもバルセロナの富裕な婦人たちによるイエズス会支援グループを指導していたアラオスは、ロゼルのローマ行きに対して助言さえ与えている。ロゼルのローマ行きへの意思が強固であることに驚いたロヨラは、1542年6月の手紙で思い留まるよう書いている。助言を行ったアラオスに対しても、「イザベル・ロゼルがここに来ることを決め、ローマ行きを公にすることを考えているならば、それが良いことかどうか、あなたはよく考えて欲しい。彼女は聖地を訪れるために、そこからエルサレムを巡礼して、その後バルセロナに再び戻る、という理由を挙げている。…いずれにせよ、イザベル自身が他の解決策を決めた方が良いだろう」¹⁷と。ロヨラは、この時点ではロゼルはローマを一時的に訪れるだけであると思っていたらしい。しかし、ロゼルの意志は固く、自身の財産を甥のフランシスコ・フェレルに託し、家具などを売却して着々とローマ行きの準備を進めた。そして1543年4月、ロゼルは友人のイザベル・デ・ジョザ（Isabel de Josa）と、自身の侍女であるフランシスカ・クルイリヤス（Francisca Cruyllas）とバルセロナを出航する。ロゼルとロヨラの再会については、1606年の裁判記録で、年取った一人のバルセロナの修道女が、ロゼルから聞いた話として証言している。「師イグナチウスをイザベルが見た時、彼は非常に驚き、手で頭を抱えて言った。『おお神よ、ロゼル、あなたがここにいる！誰があなたを呼んだのか？』 するとすぐ答えた。『神とあなた、です。師よ。』」¹⁸と。

ロヨラの意志に反してローマまで来た一行であったが、恩人でもあり貴族身分でもあるロゼルのために、ロヨラはまだ俗人身分の同志を一人イエズス会から遣わせ、ローマでの住居やその他諸々の世話をしてやった。何か仕事を与えなければ、と思ったロヨラは、新しく設立されたばかりで後に「マルタの家」となる改悛した娼婦のための施設の手伝いをロゼルに命じた。この施設は、ローマのイエズス会士たちと彼らを支援していたローマの貴族女性たちが設立したものである。ロゼルは施設を管理するローマ女性たちと親交を深め、一種の名誉院長のような形でここに暮らして、仕事をした。

しかし、ロゼルの望みは、あくまでもロヨラの手によって修道誓願を認められることであった。勿論、ロヨラはなかなか彼女の要求に応じなかったため、業を煮やしたロゼルはローマ教皇パウルス3世に、自分の修道誓願をロヨラが行うことを彼に命じて欲しいとの内容の手紙を1545年の12

¹⁵ Ebd., S. 318.

¹⁶ ファーヴルとロヨラはパリ大学の学寮で同室であった。その後ロヨラと行動を共にし、おもにヨーロッパ内の布教に関わった。Ebd., S.318 f.

¹⁷ Ebd., S.319.

¹⁸ Ebd., S.325.

月に送った。自分は、バルセロナの彷徨える女で師ロヨラに会うために2年前にローマに来た、と述べ、「…私は寡婦で自立していますので、彼を捜し求めてこちらへ参りました、彼はきっと私を神に仕えるためより良く導いてくれるでしょう。…したがって、私は、私を彼の服従下に置くという誓約を成したいのです。勿論、清貧と貞潔もです。畏れながら教皇陛下にお願いいたします、イエズス会に私が入会するのを認め、師イグナチオに私の誓約を受け入れるように命じていただきたいのです。…」¹⁹と訴えた。

しかしロヨラは出来ることなら、ロゼルの修道誓願を受け入れてイエズス会に入会させることはしたくなかった。11月にロヨラがポルトガルの同士に宛てた手紙には、ロゼルはもう年を取っていて、自立している裕福な女性であるから修道院に入る必要などない、とある²⁰。今まで何不自由なく暮らしていた貴族の年長女性に、本来の清貧と服従とは何か、イエズス会がどのような使命を持った修道会なのか、ロヨラは彼女に理解できるとは思えなかった。ロゼルは先だって自身の資産の残りを口頭による誓約でイエズス会に譲渡していたらしいが、このことは後に泥沼の争いの原因となることとなる。

教皇への直接の請願が認められ、1545年12月のクリスマスの日、イザベル・ロゼル、フランシスカ・クルイリヤス、ルクレツィア・デ・ブラディーネ (Lucrezia de Bradine)²¹の3人はロヨラの手によりサンタ・マリア・デッラ・ストラダ教会にて修道誓約を行う。「私、寡婦イザベル・ロゼルは、聖なる処女マリア、聖ヒエロニムスと樂園の天上の宮廷の前で、さらにここにおられる全ての人々の御前で、そして、貴方様、神の代理人として主イエズス会の総長であられる師イグナチオの御前にて、署名し、約束し、形式に則り全能の神に誓約をいたします：私に師によって与えられる限界に従っての永遠の清貧、そして貞潔、師によって私に課される生活様式に従っての服従を。」²²

世界最初の「イエズス会女」誕生の瞬間であった。ロヨラは一貫して彼女の修道誓願を受け入れることには消極的であったが、それを可能にしたのがロゼルの教皇パウルス3世への直接の請願であった。恐らく教皇からの命令があったのだろう、教皇直属であるイエズス会の総長として、ロヨラは彼女たちの修道誓願を受け入れざるを得なかったのである。

第3節 修道誓願の解除へ

この後ロヨラとロゼルの関係は、悪化の一途を辿ることとなる。Rahnerは、この一連の経過が、イエズス会の歴史において決定的な意味を持つことになる、と述べている²³。つまり、女性への霊的指導、および女性の入会禁止へと向かっていくことになる。

ロヨラの片腕として会憲作成にも協力したヘロニモ・ナダル (Jélonimo Nadal) の記述によると、

¹⁹ Ebd., S. 329.

²⁰ Ebd., S. 329 f.

²¹ ロゼルがローマで知り合った女性。すでにロヨラと親交があり、非常に敬虔な女性であったことから、修道女でないのに関わらず、「カプチン修道女」と茶化して呼ばれることもあったという。Ebd., S.328.

²² Ebd., S. 330.

²³ Ebd., S. 292 f.

ロゼルは毎日ロヨラの台所から食べ物を持っていくようになったという。「イグナチオは教皇パウルス3世の命で3人の女性を服従下に置いたのだが、これらの女性たちは当時ローマにいた我々にとって、常に息つく暇を与えなかった」。²⁴ さらにロゼルはこの時期体調を崩し、病床に伏せていたロヨラのもとに毎日のように現れ、世話をしようとした。ロヨラの周りにいたイエズス会士たちの証言であるのでかなり割り引いて考えなければならないが、彼女は愛情を押しつけ、ロヨラの枕元で愚痴や世間の悪口をまくし立てたため、ついにロヨラが激高して彼女を追い払うことになった、という。

1546年の4月、ロヨラは私的に教皇パウルス3世の別荘を訪れ、ロゼルたちの修道誓願を解除する許可を口頭で得た。ロゼル自身には、はっきりとこの事実を伝えなかったようである。彼女が同年5月、バルセロナ司教に宛てて、私はもうすぐイエズス会女として戻るかもしれない、と書いているからである。しかし夏には伝えたようで、この頃からイエズス会に財産を譲渡したことが許せない強欲な甥たちにせき立てられ、財産を譲渡した、しないで争いが始まる。さらにロゼルはマルタの家に200ドゥカートを寄付して自身の敬虔さをアピールするも、もはやロヨラの意志を変えることは叶わなかった。1546年10月11日付けのロヨラのロゼル宛ての手紙が残っている。

「神の大いなる栄光のために、私が今まで通りあなたの良き望みを満足させ、服従の誓約下にあなただけを置きたい、と思っているのは本当です。…にも関わらず、私は自分の力の中にあなたが望む強さを見出すことができないのです、なぜなら私の繰り返す身体上の疾患と、神、もしくは神の地上における代理人に私は第一の義務を負っている、という問題が私の頭の中を占めているのですから。さらに私が気付いたことによると、このささやかな修道会にとって、服従誓約によって課される女性への特別な任務は適合しないのです。6か月前、私は教皇聖下に詳細に説明しました、あなたを霊的な娘として服従下に置くことの配慮を取り消し、私から離れ、神の大いなる栄光のためには、むしろ数年間そうであったように、あなたを良き敬虔な母とする方が、神の大いなる栄光に適うように感じるのです。…」²⁵

このように、ロヨラは慎重にはあるが、服従誓約の解消について伝えている。理由としては健康上のことと、教皇の命令に従って世界のどこにでも行くことが優先されるので、修道女の面倒までみることは重荷である、ということだろう。この手紙はロヨラの代理としてナダルが持ってきて、ロゼルの前で読み上げられたようである。ロゼルが何を感じたかは手紙や証言が残っていないので不明であるが、少なくとも手紙は受け取った。ロヨラは安堵したと思われるが、事態はこれで終わりとはならなかった。

第4節 会憲での禁止

Arensは、これで「実験」は終わったと述べているが²⁶、ロゼルはまだ諦めてはいなかった。1546年11月3日、ロゼルとフランシスカ・クルイリヤスに、2人の服従誓約がロヨラではなく管

²⁴ Ebd., S. 331.

²⁵ Ebd., S. 332 f.

²⁶ Arens, Jesuiten, S. 84.

区司教に変更された旨の教皇文書が届いた。ロゼル以外の2人の女性はどうかというと、ルクレツィア・デ・ブランディーネはローマの他の修道院に入り、その後ナポリへと移った。フランシスカは教皇の命令に従順に従い、後にバルセロナの施療院に入っている²⁷。問題はロゼルである。彼女はローマのスペイン大使の家に移ったが、この決定に納得できず、声をあげて泣いていた。しかし甥2人にせき立てられ、不当に財産をイエズス会に取られたとして教会裁判に訴えるという行動に出る²⁸。裁判にはロヨラの代理として3人のイエズス会士が出廷し、ロゼル側は2人の甥が証言台に立った。甥の1人であるフランシスコ・フェレルは、ロヨラを「私の叔母から財産を奪おうとした」泥棒で、「偽善者」だ、と罵った²⁹。彼らの言い分は、ロヨラがロゼルの騙して不当なやり方でイエズス会に財産を譲渡させたのだから、それらを無効にして譲渡したものを返して欲しい、というものであった。しかし判決はイエズス会側の完全勝利に終わり、ロゼルは次のような宣誓を行わなければならなかった。「私、バルセロナの寡婦であるイザベル・ロゼルは、ローマのイエズス会の司祭たちにはいかなる要求や要請に応じて嫌々ながら現金や他の財産を分け与えたことはなかった、ということをここに宣言いたします。もし、私が何かを与えたとしたら、それは純粋に神への愛と私の自由意志からです。そして人々の間に流布させた中傷、私が上記の方々に対してなしたこと、言ったことは真実ではありません」³⁰と。日付は1547年2月12日となっている。

この後、ロヨラは、教皇に対して今後はイエズス会が女性会員を受け入れることや、女性に霊的指導を行うことを免除して欲しい旨の請願書を、イエズス会を代表して書くことになる。「…これら聖下への請願者たちは、今や多くの国や都市から神に熱心に仕えようとしている修道女や貴婦人たちへの霊的指導や誓願を受け入れるようにと、喫緊の要請を受けております。しかしながら聖下、まさにこのせいで請願者たちは神への奉仕の中で求められる最も重要で本質的な任務を遂行するための大きな障害が持ち上がっているのです。それらの任務は聖下に認められたイエズス会憲にしたがって行うよう誓約されているものです。この女性たちへの霊的指導はまさに始まったばかりですが、大いに妨げとなってきております。…上記の状況を鑑みて、そして法的に認証されたイエズス会の生活様式にしたがって、イエズス会の規則的な指導下に自分たちを置くことによって神に仕えようと望んでいる貴婦人たちへの霊的指導を受け持つ義務がない、ということをお認めくださるよう許可を求めます。そして請願者たちがこれらの女性たちの誓願を受け入れる義務から免除され、そして未来永劫そのような義務から自由であることを定めていただけるよう、お願いいたします」³¹。この請願がパウルス3世に受け入れられ、冒頭の女性の霊的指導と分派を禁止するという会憲に繋がっていった。初期の段階で女性との関わりや指導を否定していなかったロヨラが最終的に女性分派と霊的指導の永遠の禁止へと傾く大きな理由となったのは、イザベル・ロゼルとの一連の出来事であったことは明白である。ロゼルはこの後1年近くローマに留まった後、バルセロナに

²⁷ Ebd., S. 333.

²⁸ この裁判記録は次に所収。 *Monumenta Ignatiana IV, Scripta de Sancto Ignatio Loyola*, Bd. 1, Roma, 1904, pp.656-659.

²⁹ Ibid., p. 656.

³⁰ Ibid., p. 652.

³¹ Rahner, Briefwechsel, S. 293 f.

戻り、フランシスコ会系の捨て子養育施設などで慈善活動に従事した。そして1554年の年末に亡くなっている。1555年1月28日付けのロヨラのアラオスへの手紙の中に、短い言及がある。「母ロゼルの知らせについて我々はすでに知っている、我々は彼女に愛の業を送った。安らかにあれ。」³²

第2章 初期のイエズス会と修道女の関係

第1節 修道女テレサ・レジャデル

ロヨラは、スペインにいた時もローマへ行ってからも、決して修道女たちとの関係を絶っていた訳ではない。バルセロナ時代は地元的女子修道院の改革に熱心に取り組み、様々な助言を行っていたし、ローマ時代も女子修道院の改革に積極的に関わった。バルセロナ時代に関わった女子修道院の内、一番多く関与したのが聖クララ女子修道院であろう。この修道院は、以前にはクララ会則を取っていたが、ロヨラの時代はベネディクト会則をとっていた。15世紀には、瞑想の場というよりは貴族の娘たちの養育施設になっており、放埒な状態が蔓延していた³³。こうした状況を憂慮する改革派の修道女たちが数名おり、そのリーダー格だったのが、カタロニアの貴族出身であるテレサ・レジャデルであった。

ロヨラと彼女との出会いは、1520年から1524年の間であろう、とRahnerは推測している³⁴。テレサは聖クララ修道院の惨状を何とかしたいと強く思っており、霊的修行の場として再生することを夢見ていた。そのような時に彼女はロヨラと出会い、彼に人生の師の姿を見たようである。その後ロヨラはパリ、そしてローマへと旅立つが、その間もテレサとは頻繁に書簡のやり取りを行っている³⁵。修道女であったテレサとの手紙の内容は、聖書の引用が頻出する宗教的指導ともいえるべきものであり、この点は世俗の貴族女性であったイザベル・ロゼルの手紙の内容とは大きく異なっている。

それからロヨラがイエズス会設立に奔走した時には一時的に書簡のやり取りは途切れるが、1547年10月から再び二人の間で書簡が交わされることになる。1547年の年末ということは、女性分派と女性への霊的指導の禁止が会憲に盛り込まれた直後の時期である。聖クララ修道院の改革は敵が多く、なかなか進捗しなかった。孤軍奮闘しつつも閉塞感に襲われたテレサとその仲間たちは、この苦境を「イエズス会女」としてイエズス会員になることで切り抜けようとしたのである。しかし、すでに女性分派は会憲で禁止されていた。

彼女はロヨラへの手紙で、何度も自分たちをイエズス会に受け入れてくれるよう懇願している。1549年2月の手紙には、「…あなた様が私たちを憐れんでくださり、あなた様が私たちをあなたの

³² Ebd., S.339.

³³ Ebd., S. 291 f.

³⁴ Ebd., S. 381.

³⁵ 長く途切れた期間はあるものの、1536年から1543年まで断続的に書簡が残っている。Ebd., S. 382 ff. 1546年1月からテレサ側からの一方的な書簡が増えるが、これはすべて聖クララ修道院の改革についての相談と、イエズス会入会の懇願についてである。

娘として—そして私めをあなた様の婢として」³⁶受け入れてくれるようにロヨラに迫っている。同年3月の手紙では「私をあなた方の臣下として、あなたの下女でも構いませんから受け入れてくださいますように」³⁷と懇願し、同年4月の手紙では「あなたは良き父として、あなたの使用人たちを憐れんで愛を示していただかないといけないのです」³⁸と訴えている。

この時はまさに聖クララ修道院の改革が敵に反撃され行き詰まっていた頃で、彼女たちに代表される改革派は、自分たちが新興のイエズス会に入り、敵対勢力である守旧派と分離することで活路を見出そうとしていた。この必死の懇願に対するロヨラの返答は次のようなものである。「…我々は、我々の指導の下、服従の義務下に修道女たちを受け入れてはいけないのです。我々は全会員のため、この決定をしてくれるよう教皇に願い出ました。というのは我々の主・神への大いなる奉仕のためにはこうすることが不可欠であると思ったからなのです」³⁹と。基本的には会憲の内容を繰り返したに過ぎないものであった。ロヨラの返事にも諦めず、テレサと仲間の修道女で、一時的に院長を務めていたヘロニマ・オルハ (Jeronyma Oluja) は、同年5月、もう一度イエズス会が自分たちを受け入れてくれるよう、最後の請願をする。「…羊飼いのいない可哀想な子羊である私たちを哀れんで欲しい、ここに来て私たちを慰めて欲しいのです！」「あなたには私たちの全ての請願に対して愛をもって一つの答えをして欲しいのです、私はあなた方を受け入れる、と。」⁴⁰

しかし、彼女たちはロヨラからは受け入れを否定する返事しか受け取ることができなかった。そのため彼女たちはイエズス会に入ることを諦め、聖クララ修道院に留まって当地のイエズス会士の助力を得ながら改革を進めようとした。だが結局、改革は遅々として進まず、数年後にテレサは亡くなる。ロヨラは彼女の苦境を無視していた訳ではなく、自身が死ぬまでローマや他地域の女子修道院改革に関与し続けた。ローマのように順調に進んだ地域もあれば、保守勢力が強力で上手くいかなかった地域もあり、バルセロナは後者であった。ここで強調しておきたいのは、彼女たちが新興のイエズス会に入会し、イエズス会派の修道女、すなわち「イエズス会女」となることで難局を切り抜けようとしたことである。しかし、ロヨラとロゼルのトラブルの結果、会憲に女性の分派や女性への霊的指導を禁止する旨が盛り込まれた後のテレサの申し出だったため、新たな「イエズス会女」の誕生は叶わなかった⁴¹。この申し出がロゼルのローマに到着前であれば、テレサの信仰心を高く評価していたロヨラであったので、また違う経過を辿ったかもしれない。

³⁶ Ebd., S. 405.

³⁷ Ebd., S. 408.

³⁸ Ebd., S. 411.

³⁹ Ebd., S. 413.

⁴⁰ Ebd., S. 415 ff. 彼女はこの手紙で「苦しみの叫びがあなたの耳に届かないのか？」と、何通もの入会懇願の手紙にロヨラが答えないことを責めている。

⁴¹ ただ、この後一度だけ正式な「イエズス会女」が生まれている。スペイン王女で、フェリペ2世の妹であるホアナである。極めて政治的な理由でロヨラは入会を認めた。しかし、彼女の入会は秘密裏にされ、書簡などではマッテオ・サンチェスという男性の偽名が使われた。Arens, Jesuiten, S. 84.

第2節 禁止令の影響

ロゼルトとの苦い経験から、ロヨラは、イエズス会が未来永劫女性への霊的指導から免れるという許可を得ることになった。しかしすでにドイツやフランドル地域において、イエズス会士たちは一部の女性たちへの霊的指導に関わっていた⁴²。女性への指導義務からの免除という教皇へのロヨラの請願は、第1章で示した通り、1547年5月にすぐ認められた。その翌年の4月30日付けでロヨラの秘書をしていたイエズス会士、ファン・デ・ポランコ（Johann de Polanco）がロヨラの委託によりルーヴァン支部のイエズス会に宛てた書簡には次のような文言がある。「…上記の日に我々に示された、女性を我々の修道会の服従下に置いて入会を認めてはならない、という教皇聖下による命令（我々の兄弟であるイグナチオのより熱心な要請により）が下された。よって多くの女性に対し、こうした理由によりすべての決定を解かなければならない。」⁴³

ルーヴァンのイエズス会支部の会員たちは慌てたに違いない。というのは、当時のルーヴァン管区長であったコルネリウス・ヴィシャーヴェン（Cornelius Wischawen）が、自身の姉妹の一人であるカタリーナという女性を自らの手で服従誓約を受け入れて「イエズス会女」としていたからである⁴⁴。カタリーナは元修道女であり、敬虔な女性であったことから、彼女の服従誓約の受け入れについてルーヴァンのイエズス会では異論はなかったようである。したがって、少なくともルーヴァンのイエズス会士たちは女性の入会を不適切とはみなしておらず、上記の書簡の内容は、彼らを困惑させるものであったであろう。とにかく、カタリーナの誓約は正式に解除されることとなったのである。

ロヨラはイエズス会士たちに教会の内外での女性への霊的指導も禁じたが、すでにこの時にフランドルやドイツ地域のイエズス会では、それは一般に行われていたことであった。多くの女性たちの支援を受け、彼女たちの告解を聴くなどをしていたが、こうした直接の指導は禁止されることになった。ローマ以外の地域では女性との関わりがそう問題視されていなかった。しかしロヨラとロゼルの経緯が、結局すべてのイエズス会展開地域に影響を与えることとなり、すでに誕生していた「イエズス会女」は存在を完全否定されるに至ったのである。

では、会憲の禁止規定後、完全にイエズス会と女性との関係が途切れたのであろうか。実はそうではなく、会憲の規定には「例外的に特別な理由で修道院の中で告解を聴くことは許される」、とあり、各地のイエズス会士たちは、「例外的に特別な理由」を様々な形で用いて個人的に修道女たちの霊的指導を継続した。この後に女性と関わりを持つことを危険視したイエズス会本部から、数えきれない程指導を止めるようにとの命令が各地の支部に出されることから、このことが分かる。女性たちは、個人的にイエズス会士の指導を受ける場合と、数名で団体を形成して、指導を受けることもあった。16世紀後半から17世紀前半に活動期間が集中するこれらの団体は、イエズス会との繋がりを全面に押し出して修道会認証を目指したメアリー・ウォードの英国女子修道会は別として、軋轢を避けるためにほとんどが修道会認証を目指さない半修道団体（規模も大きく、活動

⁴² Grisar, Jesuitinnen, S. 70.

⁴³ Hansen, J(Hrsg.), *Rheinische Akten zur Geschichte des Jesuitenordens 1542-1582*, Bonn, 1896, S. 125.

⁴⁴ Akten, S. 98.

が盛んだったものとしてケルンの Ursлагesellschaft がある。彼女たちは「敬虔な女性たち」(Devotessen) と称した⁴⁵⁾ と、もしくはウルスラ会則など既存の修道会則を選択し管区司教の従属下に入るが、靈的指導はイエズス会士が行う団体 (Dóle 派のウルスラ会⁴⁶⁾ など) に大別される⁴⁷⁾。これら両方の会員たちは、実質的にイエズス会士が指導を行っていることから、「イエズス会女」とみなされることとなる。

ロヨラは最終的に女性との関わりを全面禁止したが、すでにロヨラが存命中の時も、イエズス会士の中には女性たちに同情的で、直接指導をしたり助言を行ったりする者がいた、ということは重要であるといえる。

おわりに

以上、初期のイエズス会と女性たちとの関係の経緯を考察してきたことで明らかになったことは、女性分派を否定するよりも、むしろ女性への靈的指導に積極的に関わろうとするイエズス会の姿勢である。しかし、それによってイエズス会に群がる女性たちのすべてが、イエズス会本来の活動の主旨(教皇直属、異教徒への布教など)を理解していたかどうかは疑問である。イザベル・ロゼルは勿論のこと、修道女でありロヨラの靈的娘であったテレサ・レジャデルにしても、禁域外での積極的な布教活動、まして世界各地における宣教に参加しようとする意志は見られない。この点は、17世紀前半に「トルコ人への宣教」をも厭わない旨を教皇に提出した会則で述べた英国女子修道会のメアリー・ウォードとは大きく異なっている⁴⁸⁾。彼女たちは修道院禁域制に代表される修道女に課される様々な規制を嫌っており、宗教的熱情に満ちて世界各地に自由に行動するイエズス会の新しさに惹かれたのであろう。イエズス会士になるには司祭であることが条件であるが、それは初期の段階ではまだ厳密ではなかった。

最初からイエズス会は女性の分派を禁止するつもりはなく、不幸にもロヨラとイザベル・ロゼルとの間の出来事が大きな引き金となり、女性の靈的指導まで禁止されることになった。しかし、ルーヴァンの例からも分かるように、すでに女性への靈的指導に携ったり、女性の修道誓願を受け入れていたイエズス会士もいたのである。ロヨラによる女性との関わりを禁止する命令が出された後、こうした「イエズス会女」たちの誓約は解除されたが、これ以降も会憲の例外規定を利用しな

⁴⁵⁾ ケルンの Ursлагesellschaft については、Kuckhoff, J., *Das Mädchenschulwesen in den Ländern am Rhein im 17. Und 18. Jahr-hundert*, in; *Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts* 22, 1932, S.1-35. Rutz, A., *Bildung – Konfession – Geschlecht. Religiöse Frauengemeinschaften und katholische Mädchenbildung im Rheinland(16.-18. Jahr-hundert)*, Mainz 2006, S. 191-210. 参照。ケルンを含むドイツ、フランスの「敬虔な女たち」の活動については、Conrad, A., *Die weiblichen Devoten als Instrumente der Konfessionalisierung in Frankreich und Deutschland*, in; Schilling, H., Gross, Marie Antoinette (Hrsg.), *Im Spannungsfeld von Staat und Kirche*, Berlin, 2003, S.194-214.

⁴⁶⁾ Arens, B., *Anna von Xainctonge. Stifterin der Ursulinen von Dóle(1567-1621). Lebensbild einer Jungenderzieherin*, Freiburg im Breisgau, 1903 参照。

⁴⁷⁾ Arens が挙げているのは 31 の団体である。Arens, *Jesuiten*, S. 85 ff.

⁴⁸⁾ 1621年に修道会認証を目指して教皇庁に提出された Institutum と題された規約。内容の 85%がイエズス会憲と同一であった。Dirmeier, *Mary Ward*, S. 625 ff.

がら、女性の霊的指導に積極的に関与しようとするイエズス会士は後を絶たなかった。イエズス会の理念に魅了された女性たちが、イエズス会に指導を求め、それに応えるイエズス会士がいたのである。イエズス会士に指導された女性たちの多くは半修道団体を結成し、イエズス会が勢力を増すにつれ、イエズス会に敵対する勢力から格好の攻撃材料にされる中、こうした団体に所属する女性たちは「イエズス会女」と呼ばれ、時には大きな非難を当のイエズス会からも受けることになる。

以後、各地に発生した「イエズス会女」の団体の運命はそれぞれ異なる。そして、イエズス会士たちと女性たちとの関わり方も両極端となる。歴代総長はヨーロッパ各支部に対し、何度も女性への宗教的指導を戒める勅令を発するが、それは多くのイエズス会士が女性たちと深い関わりを持っていたことを逆に物語っているのである。